

コラム

絆創膏と気候変動政策

地球環境ユニット地球温暖化政策グループ 田中 鈴子

皆さんは、転んでひざを擦りむいたら、どう手当てされるだろうか？その昔、膝小僧を擦りむいた時の手当ては、決まって「ハイ、赤チン塗って、絆創膏貼っておきましょうね。」だった。

先日、アスファルトの道路で転んだ 3 才の息子の膝小僧は、もの見事に擦りむけていた。さて、消毒して、ガーゼをあてて・・・、とやっていたら、家族から、「いや、今のやり方はそうじゃないらしい」との声。そこで、急いで傷の手当て法を検索したところ、何と、傷を消毒して、絆創膏・ガーゼをあてて乾燥させる方法は、今や間違った手当て法として挙げられているではないか！

今は、「湿潤療法 (moist wound healing)」という新しい治療法が出てきているらしい¹。まず、傷は消毒せずに、すぐに水道水で洗う。その際、できる限り異物を除去する。傷には直接ガーゼを当てず、傷を乾燥させないような医療用被覆材（ない場合はワセリンを塗った食品用ラップで代替できる）で覆う。

湿潤療法を推奨している医師は、「消毒せずに乾燥を防ぐだけで傷は勝手に治ってしまうのだ。なぜかというと、人体にはもともと傷を治す機能が備わっているからだ。すりむき傷や火傷の傷口は滲出液でジュークジュークしてくるが、実はこの滲出液は傷を治す生理活性物質の宝庫であり、このジュークジュークを逃さないように傷口を覆ってしまえば、傷はひとりでに治ってしまう。これが湿潤治療の原理である。」²と説明する。

そこで、早速、貼っていたガーゼを外し、シャワーで傷を洗浄し、ワセリンを塗ったラップを貼り付けてみた。その後、湿潤療法に適した「ハイドロコイド素材」の絆創膏に交換し、治癒を待った。その間、絆創膏の下の傷口周辺は、滲出する体液を吸収して白く膨らんでくる。この治療法を初体験している親としては、「本当にこれで良いのだろうか。」「最

¹ 筆者が調べたところ、これは比較的最近の治療法であり、医学界でこの治療法の是非についてコンセンサスが存在する訳ではないらしい。

² 特集記事：【「いい病院 2008」1月31日 掲載】「創傷治癒のための湿潤治療～もう傷は消毒しない・乾かさない～」特別寄稿】石岡第一病院 傷の治療センターセンター長 夏井 睦、2008年1月31日 <http://www.asahi.com/ad/clients/iryo/archives/ent/20080131000501.html>

初に消毒してしまったけど、新しい方法はそれでも有効なのか。」「どの段階で絆創膏を外すべきなのか。」と、疑問が次から次へと湧いてきて、不安この上ない。挙句の果てに、この絆創膏は非常に粘着力が強く、こどもの肌からはがすのに一騒動だった。結果的に、治りは良かったような気はするが、膝小僧の擦り傷の手当て一つでも、常識が変わる時は戸惑いと不安があるのだなあ、という感慨を抱いた。ただ、「傷を迅速に、なるべく跡を残さずに治す」という事が目的である事は変わらない。その目的を達成するための治療法を選択する際に、不安はあっても、新たな知見に基づく従来とは違う方法を受け入れる柔軟性が大切なのではないか、と感じた次第である。

全くレベルの違う話だが、3月11日の東日本大震災と福島第一原子力発電所事故を受け、日本の気候変動政策と、その前提となっているエネルギー政策のあり方が問われている。日本の気候変動政策では、原子力発電の維持・増強を一つの柱として、中長期的な温室効果ガス排出量を削減する目標を掲げている。日本の原子力発電は安全に管理されており、事故は起きないという「原子力安全神話」に対する信頼が今回の事故を通じて揺らいでいる中で、前提となるエネルギー政策のあり方が変われば、気候変動政策も再検討が余儀なくされると考えられる。実際に、地球温暖化対策基本法案への修正案が民主党で検討されているとの報道もある。

では、気候変動問題の重要性は、大震災によって薄れてしまったのだろうか。気候変動問題は、長期的で不確実性を孕んだ問題である。同時に、一度起きてしまったら二度と元へ戻すことのできない「不可逆性」と、長期的には広範で甚大な被害をもたらす可能性を持つという特徴もある。被災地の復興や当面の電力確保などの、喫緊の課題との比較で優先順位が下がるのは致し方ないが、長期的な気候変動問題の重要性は大震災後も変わるものではないと考える。

気候変動問題の重要性への認識や、長期的・持続的に気候変動対策に取り組む姿勢は堅持しなければならない。ただ、それを達成するための道筋や手段は、震災後の新たな状況や、科学技術の進歩に対応して、むしろどんどん変化すべきなのかも知れない。子どもの怪我への対処といった些細な問題でも、気候変動政策のような国家レベルの課題でも、時代とともに変化する状況や知識を認識して、柔軟に、現実的な対応をすることが大切なのではないか、と思う。

お問い合わせ：report@tky.ieej.or.jp